

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第545号 平成25年5月20日

井蛙の管見

橋下大阪市長（維新の会共同代表）の発言に対して、「井蛙の管見」というのは、甚だ失礼だとは思いますが。それでも私は、今回の橋下市長の発言に対しては、あえてそう申し上げざるを得ません。

「井蛙の管見」とは、一言でいえば「狭い見識」という事になります。「井の中の蛙、大海を知らず」という諺がありますが、その井の中の蛙が管を通して外界を見るという事ですから、如何に見える世界が狭いか分かっていくというものです。

さて、今回の橋下市長の発言ですが、報道によると、13日記者団に対して、旧日本軍による従軍慰安婦問題について、「銃弾が雨・嵐のごとく飛び交う中で、命を懸けて走っていく時に、猛者集団、精神的に高ぶっている集団をどこかで休息させてあげようと思ったら、慰安婦制度が必要なのは誰だって分かる」と述べ、軍の規律を維持するため、当時は従軍慰安婦が必要だったとの認識を示したものです。また、橋下市長が大型連休中に米軍普天間飛行場を視察した際、米司令官に「もっと風俗業を活用して欲しい」と求めた事も明らかにしています。橋下市長はその理由について、「性的なエネルギーを合法的に解消できる場所は日本にはあるわけだから」などと語ったとしています（5月13日付北海道新聞他）。

橋下市長が、日本の風俗産業を評価している事に驚きますが、米軍幹部に風俗産業の利用を促し、米国防省の報道官が「我々の方針や価値観、法律に反する。如何なる問題であれ、売春によって解決しようとは考えていない。ばかげている（5月14日付朝日新聞他）」といわれるに至っては、同じ日本人として恥かしい思いを禁じ得ません。

今回の報道を通じて感じられることは、橋下市長が見ている先は世界ではなく、日本の国内なのだろうなと感じます。橋下市長の発言に共感する日本人が存在するかも知れませんが、地方行政のトップであり、公党の代表の極めて内向きの視線は、誠に残念であり、国益を大いに損なっていると申し上げて置きたいと思います。

16日になって、橋下市長は「余りにも国際感覚が足りなかった。反省すべきところがある」と表明していますので（5月16日付北海道新聞他）、自身の発言が「井蛙の管見」だった事を事実上認めた形となっています。

私は、橋下市長の発言を聞きながら「夜明けの辻（山本周五郎作）」という小説の

中の「言葉は人間が拵えたものだ。どうにでも取繕ったりごまかしたりする事ができる……しかし言葉の裏にある本心はごまかせない」という一節を思い出しました。

橋下市長の発言は、既に世界中を飛び回っており、日本や日本人に対する評価、信頼を著しく損なった事は間違いありません。その傷を修復する為には、これからどれ程多くのエネルギーを費やさなければならないか、橋下市長は考えた事があるのでしょうか。

橋下市長の発言に関しては報道された範囲の事しか解りませんが、その要点は2つあると思います。

一点目は、強制連行はなかった。

二点目は、当時としては必要と考えられていたとただただで、従軍慰安婦を容認してはいない。他国でも慰安婦と同じような制度があったのに日本だけが批判されるのはおかしい。

従軍慰安婦問題については、様々な意見がありますが、1992年の朝日新聞による報道をきっかけにして大きな外交問題に発展し、今日に至っている事は誠に残念です。

この問題は、政治的な思惑で議論するのではなく、専門家の方々が客観的な事実に基づき検証すべきものだと思います。

ただ如何なる理屈を並べても、従軍慰安婦が存在した事実は曲げられません。従軍慰安婦にさせられた女性たちの苦しみや悲しみを思えば、まず議論の前提は、「従軍慰安婦というものは絶対に許されない」という認識に立つべきではありませんか。

軍隊の秩序を維持する為には、兵士の性の捌け口として慰安婦の様な制度が必要だという発想は、女性の人権を否定するだけでなく、軍人をも侮辱していると思います。

また、「今、風俗で働いている女性は皆自由意思だから積極的に活用すればいい」というに至っては開いた口が塞がりません。

更に、他国でも慰安婦と同じような制度があったのに何故日本だけが批判されるのか、という発想は、警察に捕まえられた泥棒が、「泥棒は俺だけでないのに、俺を捕まえるのはおかしい」というのに等しいと思います。そのおかしさは、子どもだってわかる筈です。

日本はかつて、朝鮮半島を植民地化し、中国大陸に進出し、満州に関東軍の傀儡政府を打ち建てました。更に、南方に手を伸ばし、米国と戦端を開き、アジアの人々や日本国民に塗炭の苦しみを与えました。それは仮に、「日本が明治維新以降、欧米列強の狭間の中で、独立国家を維持せんが為に必死に戦ってきた結果」と主張したとしても、日本によって大きな被害を受けた国々やその人々にとっては、到底受け入れられるものではありません。

理不尽に足を踏まれている者は、その足を踏んでいる者がどんな理屈をならべようと、許しはしないでしょう。足を踏まれた者の痛みに思いを致し、足を踏んでしまった事を詫びてはじめて、未来に向けた新しい関係を築く事が可能になるのだと思います。1993年の「河野談話」や1995年の「村山談話」は、未来志向の観点に立って出されたものであり、だからこそ、歴代の内閣はそれを踏襲して来たのではないのでしょうか。

戦前の日本は全て悪かったという様な考え方は余りに自虐的であり容認できませんが、しかし、日本が今後国際社会の一員として生きて行こうと思うなら、未来志向の意味を改めてかみしめる必要があると思います。(塾頭：吉田 洋一)